

科学研究費助成事業(科学研究費補助金)研究成果報告書

平成25年 6月17日現在

機関番号：34319

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2012年

課題番号：22520696

研究課題名(和文) 明治期の技芸技術(工芸)活用による産業創生

—京都七宝に見る産業クラスターの萌芽

研究課題名(英文) Researching the Effects of Applied Arts and Crafts Techniques on Industrial Production in the Meiji Period —Yasuyuki Namikawa's Shippo Works&Portent of the industrial cluster introduced in Kyoto Shippo

研究代表者 武藤 夕佳里(MUTO YUKARI)

京都造形芸術大学 日本庭園・歴史遺産研究センター 嘱託研究員

研究者番号：80388206

研究成果の概要(和文)：明治期の京都で興隆するも地場産業としての継続が困難となり衰退した京都七宝に着目し、技芸(工芸)技術活用による産業創生の過程に周辺産業の連鎖的な興隆を促す産業クラスターの萌芽の諸相を解明する。諸分野の専門家と交流し、並河家文書の翻刻や七宝釉薬の科学分析調査を実施し、更に詳細に見る事により、京都七宝の獨創性の要素が抽出できると確信を得、日本の七宝研究に近代工芸産業史としての新たな眼差しと知見を加えた。

研究成果の概要(英文)：This research investigates the unique development process of Kyoto Shippo in which it had once flourished in Kyoto during Meiji Period, facing difficult time afterwards as a local industry, and eventually found a way to its revitalization by introducing an industrial cluster created with the neighboring industries that are bonded with the arts and crafts techniques. Based upon the collaboration with researchers in the related fields, the reprint of Namikawa's documents, and some scientific analyses, this research extracted some new original aspects of Kyoto Shippo, and thereby proposed some new points of views to it as part of the history of industrial arts in Japan.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2012年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史・近現代史

キーワード：京都七宝、並河靖之、技芸技術(工芸)、産業クラスター、近代工芸産業史
並河七宝、並河家文書、七宝釉薬

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究への着眼

本研究は、明治期の京都で行われた七宝業を通じて手仕事によるものづくりが体現した近代を明らかにしたいと考えている。

従来、殖産興業による機械制生産の工場制の導入として語られてきた、技芸(工芸)技術

の近代化政策を、技芸(工芸)技術の活用による産業創生と捉える独自の視座を持ち積極的に評価しようとするものである。

近世の技芸、特に窯業は高い技術と安定した市場により成熟するが、幕末から維新以降の社会体制の変革は大きな打撃となった。

各窯業地では海外市場を視野に入れ、手仕

事を主体とする従来の窯元らが、海外向製品の生産に手ごたえを得て、機械制生産の工場制による産地の再編を行うが、堅牢な生産基盤を有した京都でさえ困難をきわめた。京都近代化策として京都陶磁器会社が明治 22 年(1889)に開業するが、実質的な操業ができず、明治 25 年(1892)に解散する。

一方で同じ京都では七宝業が新たに起こる。幕末の尾張にて、梶常吉[享和 3 年(1803) - 明治 16 年(1883)]により萌芽した尾張七宝の成功に可能性を見出した人々によって、京都七宝が興隆する。七宝業の基盤がほとんど無かった京都にて、後の帝室技芸員・並河靖之[弘化 2 年(1845) - 昭和 2 年(1927)]が求心力となり、明治中頃には、現在の東山・岡崎界限から白川沿いに陶磁器業との兼業も含め、多数の製造所の存在が『名古屋市博物館調査研究報告Ⅲ「明治期勸業博覧会に関する調査研究」明治期博覧会出品七宝工総覧』(名古屋市博物館 1996)に報告されている。

しかし、日本の七宝研究において京都七宝の産地の諸相については見過ごされ、七宝産業の全容を解明する研究は未着手である。

(2) これまでの日本の七宝研究

日本では研究者も先行研究も少なく、平成 17 年(2005)の日本国際博覧会開催を契機に明治期の美術・工芸等への関心が高まり、展覧会での七宝の展示や『京七宝並河靖之作品集』(村田理如 2007)、『七宝』(INAX 2009)など新たな書籍も増えたが、多くが美術史や工芸史の研究に留まっている。

海外では日本の七宝研究が先行しており、『MEIJINO TAKARA (明治の宝)』(THE KIBO FOUNDATION 1994)、『JAPANESECLOISSONNE』(V&A 博物館 2006)ほか、多数あるが意匠や技巧に関する作品的評価などが研究の中心である。また、日本ではこれら海外の成果を十分に検証し考察をするに至っていない。

平成 15 年(2003)に並河靖之七宝記念館、平成 16 年(2004)にあま市七宝焼アートヴィレッジが開館し、『並河靖之七宝記念館館蔵品図録 七宝』(2010)、『並河靖之七宝記念館図録 庭園と建物』(2012)、『尾張七宝』(2006)、『林小伝治家文書 1』(2008)ほか、近年、七宝業全体に関する研究が始められている。

(3) 日本の七宝史研究の確立

日本の七宝業の全容を明らかにし、明治期の七宝業を歴史の中に位置付ける総合的な研究を進める。

明治期の七宝は、殖産興業として急成長した輸出向け産業、輸土工芸としての一面的な

捉え方がされてきた。ものづくりの環境が、時代の転換期をどのように乗り越え現在に至ったのかを検証する事を見落としてきた。

従来、ものづくりは人間の生活に密着し、風土や文化の中で培われ生業を継続してきたが、明治維新の変革はその均衡を揺るがし生業の存続には新たな模索が必要となった。

京都七宝は尾張七宝の成功に倣い、七宝業の基盤のない明治維新以後の京都で開花したものである。近世からの生業を踏襲してはいないが、七宝業も基本的には他業と同じく、端境期の苦境を乗り越え成立する生業であり、近世からの伝統技法、近代の新興技法という概念で分ける事はできないと考える。

むしろ、新たな京都七宝の成立の過程においてこそ、産業クラスターの萌芽を見出すことができ、そこに明治期の七宝業の特質をみることができると確信している。

2. 研究の目的

明治期の京都七宝に着目し、手仕事によるものづくりが人と技術と知識の関わりにより地場産業として創生される過程を明らかにすることを目的としている。

京都七宝の中心的な担い手となったのは、七宝家・並河靖之である。明治維新後に七宝業を起業し、国内外の博覧会にて名声を博し、優れた製品を世に送り出し、国際的にも高い評価を得た。有線七宝技法に秀逸を極め、明治 29 年(1896)に帝室技芸員となる。本研究では、並河靖之の七宝業を通して、技芸(工芸)技術の近代化の実際をみていく。

京都に先行し興隆する尾張七宝は、尾張国東海郡服部村の梶常吉が天保 4 年(1833)に独力で七宝の製作技法を開発し始まる。近隣の遠島村の林庄五郎に技法が伝授され、嘉永 6 年(1853)頃から当地に根つき生産の拠点が形成され、文久 3 年(1863)には横浜にて林小傳治が海外への販路も開き、明治初期には産地の基盤が整っていた。

国内の七宝製作は、慶長期に朝鮮人から技法を伝授された平田道仁[天正 19 年(1591) - 正保 3(1646)]に始まる。代々は江戸幕府御抱の御金具師となり、技法は一家相伝とされた。実際には日光東照宮本社や桂離宮の七宝製造に関った他の技術者の存在も確認されているが、技術の伝承や産地形成は見られなかった。そのため、尾張七宝は庶民による七宝業参入の気運を高め、急速な発展を促した。

並河靖之は家業である青蓮院門跡に仕える坊官の傍ら、明治 6 年(1873)頃から七宝の製作に携わり自宅にて兼業を始め、明治 11 年(1878)に七宝業を専業とする。明治中頃に

は、初代稲葉七穂(一心 屋号 錦雲軒稲葉)や錦光山宗兵衛など陶磁器業との兼業も含め数多くの事業所が軒を構えていく。

明治期の産業全体に言えることだが、成長を支えた一因に技術の改良があり、京都七宝も七宝釉薬の改良が成長を大きく促した。

梶常吉以降に主流となる「泥七宝」と称された不透明で色数の限られた釉薬が、艶やかで光沢のある色彩豊かな釉薬に改良され、鮮やかな色彩表現が可能になる。

この技術改良を支えたのが、ドイツ人科学者ゴットフリート・ワグネル(1831~1892)による科学技術知識の指導である。明治11年(1878)の2月より、京都府に招聘され、医学校(現京都府立大学)で理化学、京都府舎蜜局で科学工業の指導に従事し、陶器や七宝釉薬の調整、陶磁器用原料の教授による美術工芸技術の改良を行った。

七宝業では主に尾張七宝に従事した人々がワグネルの直接的な指導を受けているが、並河靖之など京都七宝には、どの様に技術改良や伝播がされたのかは不明な点が多い。

先行研究において並河七宝の黒色釉薬は、黒色透明釉薬と称され、並河靖之がワグネルの教えを受け開発に至ったもので、並河七宝の特色と認識されてきた。

ワグネルは、既に明治8年(1875)頃にアールレンス商会の工場(東京・亀戸)にて尾張の塚本貝助らと七宝釉薬の改良に着手し、明治11年(1878)からは京都の舎蜜局でも七宝釉薬の改良を行う。この成果が並河靖之の黒色透明釉薬の開発に繋がったとされているが、明確な資料は乏しく、詳しく検証されることが無いまま受け入れられてきた。

当時の七宝業従事者にとって釉薬の改良は大きな関心事であり、それぞれに意欲的な取り組みが行われていく。現況では釉薬の改良が特定の人物による成果として認識されているが、むしろこうした時代の機運が相乗し、明治期の七宝業全体の底上げを促す技術の改良へと繋がったと考えられる。

京都七宝は既にその生業を失っており、実態がわからないまま明治期の七宝業が語られているため、こうした点についても検証し、明治期の七宝業全体を明らかとする。

3. 研究の方法

諸分野とも交流をはかり、それによって得られた視点を持って研究を行った。

(1) 研究会の開催

明治期の七宝業をみる新たな視点が必要であると考え、近代技芸技術研究会(代表 武藤夕佳里)を開催し、並河靖之の七宝業と日

本の七宝に関する研究に着手した。分野を越え様々な専門性を持つ研究者の協力を得て研究活動を重ねた。収集資料の検証を踏まえ、文書史料の翻刻や、七宝釉薬の科学分析調査を検討し、収集データの考察を行った。

七宝釉薬の科学分析、尾張七宝と京都七宝の相対的な研究、日本の七宝技法の系譜など、新たな課題が見出され、これまでは機会がなかった、総合的な七宝研究が可能となった。

(2) 七宝に関わる文献、資料の網羅的収集

京都七宝を知る手掛かりとして、文献資料はもとより古写真や七宝製作に関する資料などの網羅的な収集を目指した。七宝に関する資料は埋もれている事も多く、収集の範囲についても、近代国際陶磁研究会や日本産業技術史学会、文化財保存修復学会、日本庭園学会など、諸分野の先行研究も視野に入れ、資料収集の発掘的調査を行った。

(3) 収集資料整理と調査

並河靖之七宝記念館(以下、記念館)の協力を得て文献資料の調査を行い、一部の資料については、研究会で翻刻を行った。

収集資料は次の通りである。1. 『明治四十年日記従未一月並河』、2. 『明治四拾壹年日記従申一月並河』、3. 『明治四拾貳年日記従酉一月並河』、4. 『明治四拾三年日記従戌一月並河』、5. 『明治四拾四年日記従亥一月並河』、6. 『明治四拾五年大正元年八月日記従子一月並河』、7. 『大正三年日記従寅一月並河』、8. 『大正四年日記従卯一月並河』、9. 『大正九年一月日記並河』、10. 『大正十年一月日記並河』、11. 『明治十二年己卯年雜記従一月』、12. 『明治廿三年寅年五月諸届簿』、13. 『明治三十四年三月記事七寶部』、14. 『明治三十五年賀状従一月』、15. 『明治三拾九年五月より商用発●並河店』、16. 『並河七宝店売上簿明治三十七年』、17. 『明治四十一年十一月日誌並河店』、18. 『大正四年一月起 日給交附簿並河勲章工場』、19. 『大正七年一月現金払簿並河』、20. 『大正八年一月現金払簿並河』、21. 『大正十二年一月現金払簿並河』、22. 『Namikawa: Guest List』、23. 『Namikawa Visitors Book』、24. 25. 26. 27. 並河靖之賞状屏風、28. 29. 30. 並河靖之賞状<任命状>屏風、31. 並河靖之宛て書状貼り交ぜ屏風

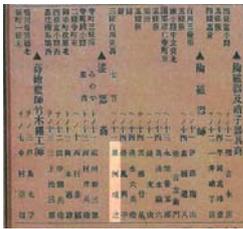
(4) 京都七宝に関わる技法の調査

京都七宝の技法を解明するため東京学芸大学とともに七宝釉薬の自然科学分析調査に取り組んだ。当初は記念館所蔵の七宝及び釉薬材料の蛍光エックス線による分析調査

を行ってきたが、明治期の七宝釉薬を検証する上で、同時代の製作者や生産地の七宝についても同様の調査を行い、数多くのデータを集積する必要があり、濤川惣助の七宝や尾張七宝にも着手した。(協力:濤川惣助顕彰会、あま市七宝焼アートヴィレッジ)

(5) 明治期の産業創生に関する調査

近代庭園研究会(通称・植治研究会/代表 尼崎博正氏)にも参加し、造園学、庭園文化史の成果から、京都七宝の産地となる東山三条白川沿い及び近隣の岡崎、南禅寺界隈の同時代の動向を考察するなど、様々な分野の知見を七宝研究に取り入れた。同研究会にての近代庭園の数寄者のネットワークに関する人と場の結びつきに着想を得て、収集資料の活用によりランドスケープの手法を取り入れ、明治期の京都の七宝業を俯瞰する『明治期七宝工分布図』を作成した。『大典記念京都市外地図附著名所会社銀行商工業案内』[大正4年(1915)11月4日印刷10日発行 著作兼発行人印刷人中村大観 製図者田坂平策 彫刻者瓜生息富 発行所京都編纂所]をベースとし、『名古屋博物館調査研究報告Ⅲ「明治期勸業博覧会に関する調査研究」明治期博覧会出品七宝工総覧』にある京都の七宝工の所在をプロットした。



「明治期の京都七宝工分布」

4. 研究成果

(1) 並河家文書の翻刻

①並河家文書:前節(3)で報告した資料は研究会にて検証し、史料と位置づけ「並河家文書」とした。日記10冊[明治40年(1907) - 大正10年(1921)], 諸届、賀状名簿、運営に関わる記録簿など11冊、芳名帳が2冊[明治25年(1892) - 昭和5年(1930)], 各種博覧会の賞状、各職務に関わる任命状、書簡類を貼り交ぜ屏風に仕立てたもの8隻である。

日記及び記録簿は、表紙に表題を記入し和綴りに装丁され、1.から10.と、17.は、表題に“日記”とあり日々の事項が綴られている。

15.『明治四十一年十一月日誌並河店』(以下、『店日誌』)はこれのみが確認され、前者を『家日記』とし区別した。『店日誌』の記載と同じ期間の明治41年(1908) - 明治42(1909)の『家日記』をみるにより、文書の性格や

当時の並河家の様子を複合的にみることができると考え、この二冊に着目し翻刻した。(翻刻協力:『店日誌』宇田川滋正氏 前 京都造形芸術大学歴史遺産研究センター主任研究員)、『家日記』田中潤氏 学習院大学 助教)

22.『Namikawa: Guest List』[明治25年(1892) - 明治36年(1903)], 23.『Namikawa Visitors Book』[明治37年(1904) - 昭和5年(1930)]は通算27年間に及ぶ訪問者の直筆署名で3000名を超える。(翻刻協力:フォブス・G・アーヴァイン氏 英国V&A博物館学芸員)

屏風24.から27.が主に博覧会等の賞状、28.から30.は主に任命状、31.は並河靖之宛ての書簡などである。(翻刻協力:三浦麻衣子氏 国文学研究資料館、田中潤氏、長沼暦氏)

②文書翻刻の意義:並河家文書のそれぞれの翻刻により、『店日誌』、『家日記』、『芳名帳』との照らし合わせが可能となり、わずか一年分ではあるが複合的な情報を得た。記録からは、宮家、官僚らと交流し、七宝家、京都の名士として敏腕を振るう実業家・並河靖之の姿がありありと浮かび上がってきた。

(2) 七宝釉薬に関する科学分析調査

①調査の経緯:二宮修治氏(東京学芸大学教授)及び二宮研究室、荒井経氏(東京藝術大学大学院 准教授)の協力を得て七宝釉薬に関する調査と研究を継続してきた。七宝釉薬の科学分析調査は初の試みである。先行研究で認識されてきた並河靖之の黒色透明釉薬とは、どのような材料による釉薬かを確かめるため、ポータブル蛍光X線分析装置(S I I ナノテクノロジー社製 SEA200)を用い七宝釉薬を測定し、基礎的なデータを採取した。

並河七宝の黒色釉薬は、青味や赤味を帯びた黒など目視の範囲でも認められ、色幅があると考えられた。背景に黒色を使用すると、有線七宝技法の金属線が象る図柄をより鮮やかに浮かび上がらせる効果を担っている。

当時の釉薬の製作方法の記録資料などは現況では確認できておらず、目視による色の違いを裏付ける手掛かりにしたいと考えた。

②現段階での所見:黒色釉薬の着色元素の解明を第一の目的とし、緑色、白色、赤色、青色の地色を含む七宝作品26点と粉末状釉薬とそれに対応する焼成見本のセットを9件、及び焼成見本を伴わない粉末状釉薬で「コバルト 黒」と記載された資料も分析を行った。詳細な分析と検証には未だ至ってはいないが、現時点で得られた結果は次の通りである。

七宝作品26点中、黒色の地色を持つ七宝は17点である。分析の結果からは、基礎的な釉薬の材料は全てカリウム鉛釉が含まれ

ていた。黒色の釉薬からはマンガン(Mn)、鉄(Fe)、コバルト(Co)、銅(Cu)の四種類の着色元素が検出された。中でもコバルト(Co)、銅(Cu)は、ほとんどに含まれており、二つの元素のX線強度比とその他の含有元素を基準にグループを大別した。焼成見本を伴わない粉末釉薬「コバルト 黒」は何れとも異なり、おおよそ6つの大別となった。黒色釉薬はコバルト(Co)、銅(Cu)を中心とした複数の着色元素によって作られており、数種類の黒色の存在が判明した。この他、アンチモン(Sb)を含むものが1点、特徴的な元素として亜鉛(Zn)が検出されている。

測色計の調査では、測色の波形のパターンにより分類が可能となり、5つの大別をみたが、先の検出元素による大別とは必ずしも対応する関係ではなく、測色計の結果を活用するには今後のさらなる検証が必要である。

以上から、並河七宝の黒色釉薬は少なくとも6種が存在し、単一ではなく、複数あることがわかった。目視での色の違いを科学分析調査の結果によっても裏付けることが可能となった。今後、先行研究との比較や検証により、並河七宝の製作を明らかにする材料となることが期待される。(協力:新免歳靖氏 東京文化財研究所、佐藤香子氏、小川絢子氏 東京国立博物館、村上夏希氏 東京学芸大学)

(3) 京都七宝の舞台

『明治期七宝工分布図』は、三条白川一带に、20余りの製造所の存在を浮かび上がらせ、同時に周辺環境や産業もみる事が出来る資料となった。一この並河の成功をモデルとして、三条大橋から三条白川橋一带には、二十余軒の七宝業が軒を連ねる有様となった。一「並河靖之の七宝と中原哲泉」『京七宝文様集』吉田光邦編 昭和56年(1981)と、明治10年代前半の京都七宝の盛況を伝える一文があるが、その活況を裏付けた。

近在の七宝工は、並河靖之、錦光山宗兵衛、永井仁右衛門、紀伊馬榮、佐野豊三郎、宮崎銀三、稲葉七穂、志水熊吉、十河元次郎、宮崎銀二、辰巳才和、高谷讓三郎、三上伊左衛門、伊藤捨次郎、志水辰之助、山本祐山、高橋駒治郎、安田源七、菅谷鐵太郎、伊藤友、片岡榮助、寺島巳之助、柴田宗三郎など、23件があげられた。

(4) まとめ

本研究は明治期の七宝業を近代工芸産業史として研究を進めるものであり、この研究で得られた全ての成果は、日本近代史の有益な資料となり、貢献できるものと考えられる。

京都七宝は維新後の低迷する京都で興隆し、瞬く間に日本の重要な産業となり、国際的にも競争力のある産業へと成長するが、そこには産業クラスターによる産地の形成があったと考える。京都の商いを紹介した『都の魁』[明治16年(1883)]の「鬼國窯司並河靖之」は、七宝業で独立した頃の並河靖之である。同書には絵の具商「大和大路通四条下ル三丁目岩田半兵エ」もみえ、看板には「西洋各国陶器向き七宝製釉薬種々賣捌所」、「和漢西洋 陶器科 七宝焼 絵の具類」とあり、陶磁器などの釉薬とともに七宝の釉薬も既に販売されていたことを知ることができる。

日本の七宝業は、明治10年代前半に大きな前進をみるが、その躍進を支えたのが、七宝釉薬の改良であり、ワグネルの科学技術知識の指導である。『ワグネル傳』[大正14年(1925)]は、一ワグネル氏が七寶を改良せる點は奮來溷濁せる釉を清澄にし美麗なる色彩を作りも以て我が七寶界を革新せしなりと。一と七宝釉薬の改良を伝えている。

明治8、9年(1875、1876)頃アーレンス商会にて、ワグネルが関与した七宝釉薬の改良は、七宝の製造方法そのものに変化をもたらすものであった。後に七宝会社[明治4年(1871) - 明治23年(1890)]や瀧川惣助[弘化4年(1847) - 明治43年(1910)]によって実践されたが、並河七宝との関りは不明である。

近世の七宝にも透過性のある七宝釉薬は多々あり、平田家歴代の七宝にも見られる。京都では明治9年(1876)に並河靖之が透過性のある釉薬を開発しており、一明治九年 並河靖之は玻璃透徹及茶金石挿入ノ製法ヲ發明スー「京都七寶沿革」[『京都府府著名物産調』明治33年(1900)]の一文がある。

翌年の第1回内国勸業博覧会で靖之は七宝諸器にて鳳紋賞牌を受賞するが、その中の「花活 銅、鬼國窯舞樂図」は、現在、宮内庁三の丸尚蔵館が所蔵する舞樂図花瓶である。当時の審査員評語に「透明不透明ノ瑤瑯ヲ班雜シテ」とあり、透過性がある釉薬と不透明な釉薬の使用が説明されており、同作品の熟覧調査の際にも目視により確認した。

いずれにせよ、明治8、9年頃に各所で行われた七宝釉薬の技術改良が、日本における七宝業の躍進の大きな原動力となり、急速な成長をみるものであったといえよう。

しかし、これはワグネルの七宝釉薬の改良を疑うものではなく、現在みられる釉薬は、彼の技術改良あつての事は事実である。さらに、ワグネルの功績はそれのみならず、知識や情報を実務にあたる職工達にも共有するという教育の実践でもあり、日本のものづく

りの環境に意識や思想の改革を促した。

在来技法を伝承がないままで、新たな七宝製作を展開する当時の七宝業にとって、ワグネルの行った教育の意義は大きい。

並河靖之は、経験のない七宝業を生き抜く糧とし、自らの努力と研鑽によって生業とした。一見すると無謀ともいえる挑戦ではあるが、それを許容するものづくりを支える豊かな風土が京都にはあり、京都七宝の環境も恵まれた場にあったことは重視したい。

一帯には近世からの粟田焼や刀鍛冶など様々な生業があり、明治期には在来の生業と、新生する京都の人や文物が共存、交流する先進的な場で、瞬く間に京都のみならず日本の七宝業における重要な拠点となった。

当時の七宝業は、開業に関する初期投資が低く、新興ゆえ在来産業のような制約や縛りも少なく自由に起業でき、将来の可能性あるものとして人々に受け入れられた。

並河靖之とその七宝業は、人と技術と知識の関わりを通じて、個人や一企業、一業種のみならず、京都から世界へと広がり繋がりゆくものであり、日本のものづくりが近世から近代をどの様にこえて、現在に至ってきたのかを明確に映し出すものである。

明治期の技芸(工芸)技術を活用した日本のものづくりが、新たな時代の産業創生である事を積極的に評価し、改めて日本のものづくりと近代を検証していくために、並河靖之の七宝業と京都七宝は重要であり、その解明を通じて新たな知見が得られると確信する。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計8件)

①武藤夕佳里、「技芸(工芸)技術活用による産業創生—並河七宝と技法の背景」、日本産業技術史学会第26回講演概要集』、査読無、2010、pp. 7-12

②武藤夕佳里、「京都七宝-並河靖之の技法・七宝釉薬を中心に」、『近代陶磁12号』、査読無、2011、pp. 8-17

③武藤夕佳里、「近代の数寄空間にみる七宝技法による引手と釘隠し」、『近代庭園の成立要因に関する研究—日本の近代庭園にみる煎茶文化とその地域性』、査読無、2011、pp. 179-190

④武藤夕佳里、「七宝技法にみる技芸技術の系譜-七宝技法の引手と釘隠し」、『日本産業技術史学会第27回年会講演概要集』、査読無、2011、pp. 1-13

⑤武藤夕佳里、「都をどりのおもてなし」、『庭園学講座18 庭園都市・京都-東山の庭園文化』、査読無、2011、pp. 107-117

⑥武藤夕佳里、「史料にみる円山の遊覧」、『庭園学講座18 庭園都市・京都-東山の庭園文化』、査読無、2011、pp. 94-101

⑦武藤夕佳里、「並河七宝(並河靖之七宝記念館)の釉薬に見る明治期の七宝技法の研究」、『文化財保存修復学会 第34回大会発表要旨集』、査読有、2012、pp. 44-45

⑧武藤夕佳里、「並河靖之七宝記念館と庭園」、『平成24年 日本庭園学会 関西大会シンポジウム 資料集』、査読無、2012、pp. 15-18 [学会発表](計6件)

①武藤夕佳里、「技芸(工芸)技術活用による産業創生—並河七宝と技法の背景」、日本産業技術史学会第26回年大会、2010.6.26、東京大学駒場キャンパス

②武藤夕佳里、「京都七宝-並河靖之の技法・七宝釉薬を中心に」、近代国際陶磁研究会、招聘、2011.6.12、愛知県瀬戸市文化センター

③武藤夕佳里、「七宝技法にみる技芸技術の系譜-七宝技法の引手と釘隠し」、日本産業技術史学会第27回大会、2011.6.18、大阪経済大学

④武藤夕佳里、「並河七宝(並河靖之七宝記念館蔵)の釉薬に見る明治期の七宝技法の研究」、文化財保存修復学会 第34回大会、口頭発表、2012.6.30、日本大学文理学部百年記念館

⑤武藤夕佳里、「並河靖之七宝記念館と庭園」、平成24年 日本庭園学会 関西大会シンポジウム、招聘、2012.11.10、龍谷大学

⑥二宮修治、武藤夕佳里、新免歳靖ほか、「明治期の並河七宝(並河靖之七宝記念館蔵)の七宝釉薬に関する調査報告-黒色釉薬を中心に-」、日本文化財科学会第29回大会、ポスター発表、2012.6.23、京都大学文学部新館 [その他](計1件)

武藤夕佳里『明治期の技芸(工芸)技術活用による産業創成-京都七宝に見る産業クラスターの萌芽』、成果報告書2013、603pp.

6. 研究組織

(1)研究代表者 武藤 夕佳里(MUTO YUKARI)
(京都造形芸術大学 日本庭園・歴史遺産研究センター 嘱託研究員)

研究者番号：80388206

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし